

これからの住まいと ライフスタイルに関する 生活意識調査—食生活分野

山下 満智子

Written by
Machiko Yamashita

大阪ガス(株)エネルギー・
文化研究所 研究員

本調査は、3月11日の東日本大震災以前(平成23年1月20日から2月8日に実施)の調査であることをはじめにお断りしておきたい。本稿執筆時(平成23年7月中旬)には、福島県産の牛肉から放射性セシウムが検出され、既に広い地域で消費されていたことが判明した。また放射性セシウムに汚染された稲わらが宮城県から福島、新潟、山形三県に流通して肉牛のえさに使われたこともわかった。過去、中国産の冷凍野菜の農薬汚染や冷凍餃子事件などが引き続いた後の平成21年の生活意識調査では、食の安全・安心や農薬などに対する関心が非常に高まった。東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故以来、食品の放射能汚染に対する関心が極めて高くなっていると思われるが、本調査には反映されていない。

食生活分野 主なトピックス

● 食生活の満足度は、77・9%と引き続き高い。

● 食生活上の不満については、栄養バランス、安全・安心の順位は変わらないものの、平成22年に一旦減少した安全・安心についての不満のポイントが再び上昇している。

● 調理をしない・したことがない割合は、30代以上の男性で減少傾向にある。一方、20代男性では、調理をしない・したことがないが5割近くと著しく増加した。

● 調理の好き嫌いでは、60代男性32・1%、50代30・5%と嫌いが増加し、好きを上回った。

● 調理の面倒感は、さらに上昇傾向が見られ、特に、20代の男女、40代の女性、50、60代の男性で調理に対する面倒感が強くなっている。

● 男性で引き続き調理時間が長くなる傾向が見られ、30、40分という調理時間が男女を問わず主流となっている。

● 携帯メールによる料理情報の入手は、全体としてはまだ極めて低い。20代女性のみ、19・7%と突出して多い。

食生活の満足度と不満

食生活全般への満足度は77・9%と引き続き高く、不満は5・8%と低い。

食生活で不満な点は、栄養のバランス35・6%、安全・安心31・7%、経済性・節約できない26・9%、農薬など17・8%、生ゴミの処理14・0%の順であった。過去、平成20年には、中国産の冷凍餃子問題(1月)、うなぎの産地偽装(7月)、外国産事故米の転売(9月)と食の事件が相次いだ。その後の平成21年の調査では、安全・安心(1位)39・9%、農薬など(3位)24・4%の不満が突出する形になったものの、翌年の平成22年調査では、栄養バランス35・1%、安全・安心24・9%、経済性・節約できない22・9%、農薬など15・1%となり、

順位は例年の順に戻った。しかし平成23年調査では、安全・安心が昨年調査に比べ7ポイント近く再び増加していることに注目したい。

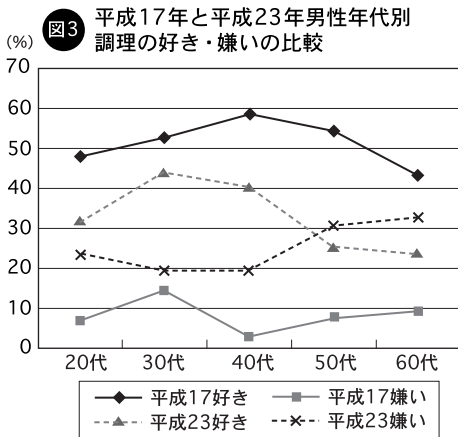
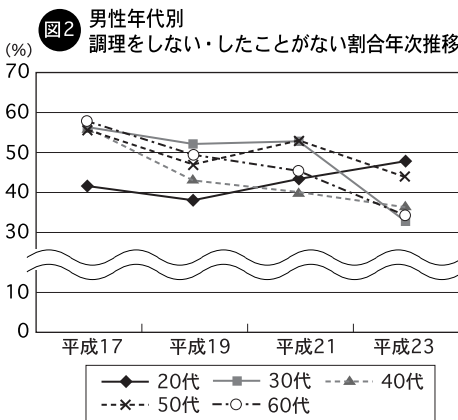
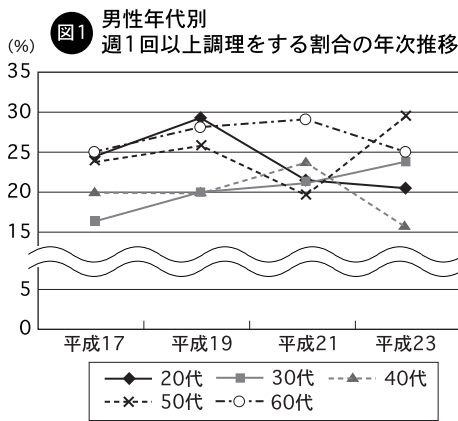
また、東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故以来、水や農産物、牛肉や稲わらの放射能汚染が次々と明らかになり、食の安全・安心への不満が著しく高くなっていることは明らかである。

食生活の不満を性年代別に見ると、栄養のバランスへの不満は、20代女性は52・5%、男性は39・6%と高く、安全・安心は、40代女性は45・9%、60代は39・1%と高い。農薬なども同じく40代女性は25・9%、50代は26・6%と高い。一方、20代では農薬などに対する不満は、男性2・1%、女性8・2%と低い。

調理頻度

女性では、週6〜7日で毎日調理をする割合は、50代は89・4%、40代は78・5%、60代は75・8%、30代は72・1%と7割を超えている。一方、20代女性では、週6〜7日は19・7%、週4〜5日は19・7%、週1〜3日は14・8%、月1回は9・3%、月2回は23・0%、月3回は9・8%、しないは13・1%と調理頻度にばらつきが見られる。

男性の調理頻度では、調理をしないが、60代男性を除き3割以上で一番多く、次いで20代では、月1回以下は22・



9%、週1〜3回は18・8%、30代では、月2〜3回は23・9%、40代では月1回以下は26・1%、月2〜3回は21・6%の順であった。調理を週1回以上する割合(週6〜7回するから週1〜3回以上する割合を合計)が、50代は29・5%、60代は24・8%、30代は23・9%、20代は20・9%、40代は15・9%となった。平成17年、19年、21年と比較すると男性の中では、50代、60代の調理頻度が一番高く、30代の調理を週1回以上する割合が、一貫して増加傾向にあり、20代で調理頻度の減少傾向が見られた(図1)。

調理の好き・嫌いについては、全体では、好き・どちらかといえは好き(以下、好きと表記)44・5%、嫌い・どちらかといえは嫌い(以下、嫌いと表記)19・4%、どちらでもない14・9%となった。男性では、30代を除き、どちらでもないが好きを上回った。性年代別では、男性60代、50代で嫌い32・1%、30・5%と高く、好きの23・9%、25・3%を上回った(図3)。女性では、30代で好きの割合が62・8%と高く、20代で好きの割合45・9%と低い。40代で嫌いの割合が21・5%と高い。女性でも20代で好きの割合が著しく減少、嫌いの割合が20代、40代で増加したが、男性に比べて嫌いの増加割合は

調理の好き・嫌い

図4 平成17年と平成23年女性年代別調理の好き・嫌いの比較

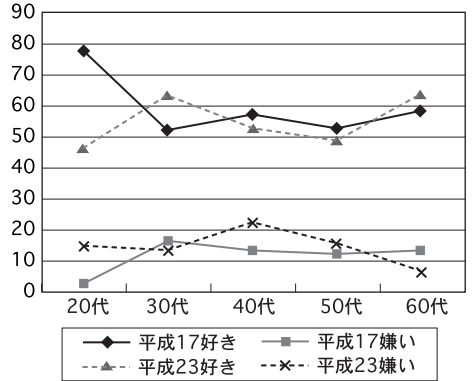


図5 性年代別調理の面倒感年次推移

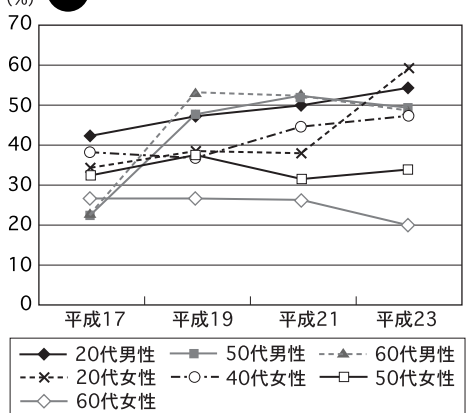


図6 男性年代別週1回以上片付けをする割合の年次推移

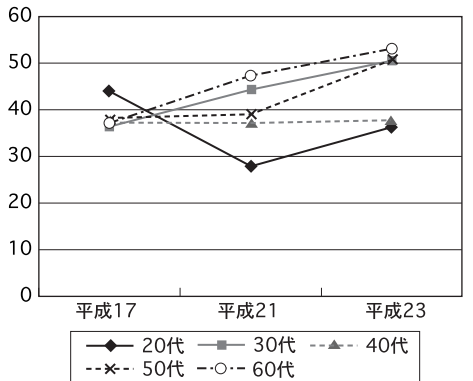
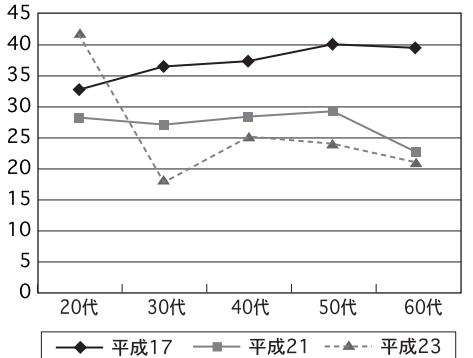


図7 男性年代別片付けをしない・したことがない割合



小さい(図4)。平成17年調査では、男性のすべての世代で、調理が好きが、嫌いを大きく上回っていたが、平成23年調査では、すべての年代において、男性の調理が好きの割合が著しく減少し、嫌いの割合が増加しており、特に40代以降でその割合が大きくなる傾向が見られた。女性では、30代、40代で嫌いの割合が高くなるが、好きの割合には年代による差があまり見られない。

調理の面倒感

調理をすることを面倒と思うかについては、そう思う・どちらかといえばそう思う(以下、思うと表記) 41・3%、思わない・どちらかといえばそう思わない(以下、思わないと表記) 28・4%、性年代別では、20代女性は59・0%、20代男性は54・2%と面倒感が強く、次いで50代、60代男性は共に49・5%、40代女性は48・4%の順で面倒感が強い。

平成17年よりの年次推移を見ると50代、60代の女性を除き調理の面倒感には、上昇傾向が見られ、特に、20代男女、40代女性、50代、60代男性で調理に対する面倒感が高くなっていく(図5)。

食事の片付け頻度

週1回以上片付けをする男性は、60代は52・3%、50代は50・5%、30代は50・7%で高く、これらの年代では5割を超えている。一方、40代は37・5%、20代は35・5%と低い。平成17年、21年調査と比較すると週1回以上片付けをする男性は、60代、30代、50代で大きく増加している(図6)。一方、40代男性の片付け頻度は、平成17年以来ほとんど変化が見られない。

男性の片付けをしない・したことがない割合は、30代は17・9%、60代は21・1%、50代は24・2%、40代は25・0%、20代は41・6%の順で、20代を除き平成17年調査、平成21年調

査と比べ、大きく減少した(図7)。

夕食のための調理時間

夕食のための調理時間は、全体では、調理時間30分未満25・7%、50分未満22・2%、20分未満16・2%、40分未満15・5%の順であった。

女性では、子育て世代である30代で50分未満が32・6%と一番多く、40代では30分未満30・1%と50分未満29・0%と調理時間が二極化した。ほぼ子育ての終了した世代の50代では、20分未満17・6%、30分未満21・2%、40分未満18・8%、50分未満21・2%、60分以上18・8%と調理時間にはばらつきが見られた(図8)。

男性の夕食調理時間では、30分未満が、20代は25・0%、40代は31・8%、50代は22・1%、60代は32・1%と30代を除き一番多くなった(図9)。平成17年調査では、20分未満の割合

図8 女性年代別夕食調理時間

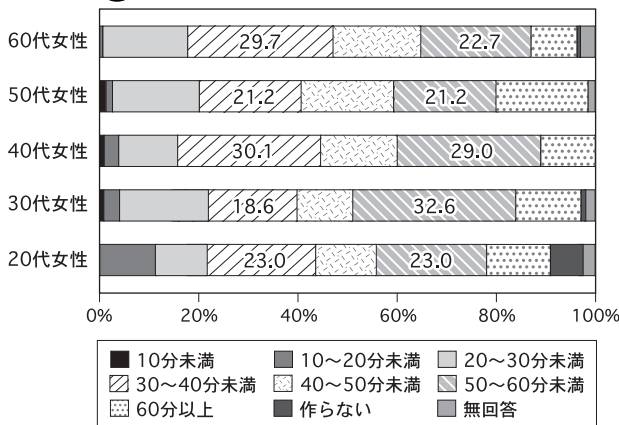
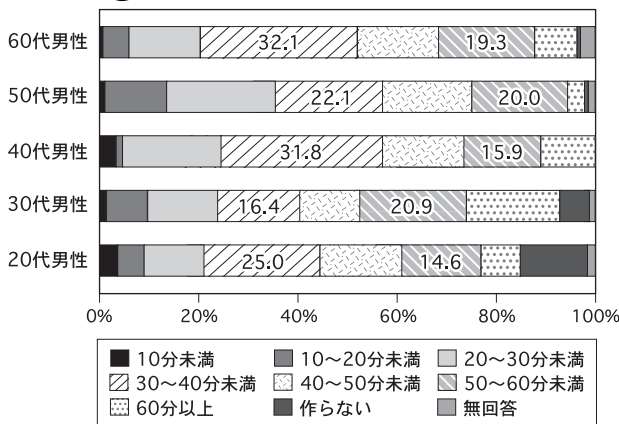


図9 男性年代別夕食調理時間



料理情報の入手

が、20代は13・8%、30代は20・8%、40代は19・6%、50代は18・8%、60代は24・4%とすべての年代において一番多い調理時間であった。男性では全般的に調理時間が長くなる傾向が見られる。

テレビ46・9%、本41・7%、雑誌32・7%、インターネット28・8%、友人・知人20・6%、親16・9%、スーパーなどのチラシ10・2%であった。テレビは、50代女性は74・1%、60代は68・8%と高い。本は、30代女性は59・3%、50代は57・6%、40代は48・4%と高く、雑誌は、50代女性は58・8%、40代女性は48・4%と他世代と比べて高い傾向が見られた。イン

まとめと考察

ターネットによる料理情報の入手は、平成17年調査に比べ、9・0%から28・8%へと大幅に上昇した。特に20代女性は54・1%、男性は45・8%、30代女性は46・5%と高い。20代女性では、料理の情報源としては親が60・7%と一番高く、次いでインターネット54・1%、本44・3%、雑誌26・2%、テレビ21・3%、携帯メール19・7%の順であった。携帯メールによる入手は、平成17年調査では0・4%、平成23年調査でも2・4%と全体としてはまだ極めて少ないが、20代女性では、19・7%と突出して多い。男性の各世代で、料理情報の入手先が特にないが3割弱あった。

男性の調理が進展する中で、女性の5割前後が、調理が好きと回答し、男性に比べ年代による差はあまり大きくない。また全体としては面倒感等も緩和されている。一方、男性では、50代、60代で、調理や片付け頻度、調理時間が増加したが、それにと

ない、調理が嫌いが、好きを上回り、面倒感も上昇している。

40代男性では、他世代男性と比べ、平成17年以来、片付け頻度にほとんど変化がなく、他世代に比べて極めて低い。また週1回以上調理をする割合も、どの世代に比べても低い。

調理頻度にはまだまだ男女差が残るが、嫌々ながらも調理をしている50代、60代の男性に対して、40代は、現在は仕事が忙しいこと、あるいはそれを口実に、また家庭内で調理をしない状況が黙認されているようにも読み取れた。しかし50代、60代の男性と同じようにやがて定年後を意識して、調理に取り組むことになるのではないかと考えられた。

一方、若年世代では、34歳以下の単身の男性の食の外部化率は、74%以上と非常に高くなっており(平成21年度外食産業統計、全体は42・2%)、本調査でも20代男性の調理をしない・したことがない割合は、5割に近くなり、他世代の男性の調理頻度の増加と対照的な傾向を示した。その中で、30代男性の調理頻度、片付け頻度は、増加傾向にあり、調理の面倒感も比較的低い。上の世代と比較して、家庭で、自然体で調理を分担できる男性の登場といえるかもしれない。一見、調理離れと見られる20代男性がやがて30代と同じように調理に取り組むかどうかは今のところ分からない。職業形態・収入など20代、30代男性を取り巻く社会環境が著しく変化する中で、若年男性の調理意識や行動について、引き続き注視する必要があるだろう。